

II. 学びの森の風景

学びの森の住人たち (12)

—学校でもない学習塾でもない、
〈学びの森〉という世界が投げかけるもの—

アウラ学びの森 北村真也



卒業 —アウラをあとに—

「それで、そこからヒロシは高校に行くわけやけど、一番最初に、電車乗ったことないので、電車の乗り方、切符をどうやって買うのかわからんとか言っていて、サトルに聞いていたような気がする」

「聞いていた」

「高校の最初のオリエンテーションが植物園かどこかであったんじゃない？」

「ああ、そうや、そうや」

「植物園も行ったことがない」

「バスも乗ったことないし」

「そうや、そうや、バスをどうやって乗るのかとか。それで結局、サトルがついていってくれたんかな？」

「うん、“行き方がわからへんし一緒に行こう” って…」

「なんかそんなことやった。だから、そんなところからヒロシの高校生活が始まったわけや」

「うん」

「どうやった？高校生活は。楽しかった？」

「た？」

「まあ楽しかった。なんか勉強よりも野球部がメイン」

「ああ、そうやったなあ」

「で、学校に入学して野球部の同期、同学年のやつらも野球しに来ていたようなもんやって言っているから…。多分定時制高校に来ている人って、あまり目的のない人が多いんやけど、やっぱりその中で野球していたやつらは、それをメインにやっていて…」

「ということは、ヒロシにとって野球部に入ったっていうことがめちゃくちゃ大きいわけや？」

「まあ。でもかなり野球部に入ったことで変わったと思う」

「ああ、ほんまあ」

「やっぱり上の人もいやはるし…」

「先輩とか？」

「うん、いろんな…まあ上下が厳しいわけじゃなく、みんな横の関係やけど…。今でも行って野球したりするくらいやから…」

「ああ、ほんまあ」

「うん。連絡も取るし」

「そうか。ということは、さっき言った、一番最初にアウラの限られた先生たちとの間のコミュニケーションから始まり、同年代の、子どもたちとのコミュニケーションがあり、で、高校へ行ったら、そこは先輩後輩、そういうコミュニケーションがあり…、まあそういう意味ではだんだんステップアップしていくわけや、ヒロシの中では。そして、だんだん自信を獲得していくわけ？コミュニケーションに対して…」

「まあ、自信はそんな未だにないけど…。定時制っていろんな環境の人が集まっているやん、その中では、そんなにある意味お互いに興味を持たへん。普通の学校とかでは、一人だけ来なかったら“ヒロシなんで来いひんねん”って、そこ一人に目が行くところを、定時制ってそういうところが…」

「みんなそれぞれに事情を抱えていたりするから」

「そう、来ていたり来てなかったり、ってなっても、何なんヒロシっていう雰囲気もないから…。その中で、定時制ってやっぱり留年する人も多いから、年が上の同じ学年になる人もちょろちょろいたし…」

「だからみんな同じじゃなくても、オッケーでいれるわけや？」

「そうそう」

「だから、それはヒロシにとってはよかったわけや？」

「もう一番よかったと思う」

「一番よかった…なるほど。でもまあそういうところ、アウラも一緒よな？

別に…みんなが同じじゃなくてもオッケー」

「そこが一番大きかった。アウラ行って、定時制行って…その人間関係が、今人生の中で一番その人間関係が基盤になっているところがあるから。野球部とも連絡取るし、ここアウラの人らとも連絡取るし…」

「なるほど。それはヒロシの人生の中でけっこう大きな支えになっているわけや」

「うん」

「勉強も大丈夫やった？高校に進学して」

「勉強は…それが、予想以上にレベルが低かった。定時制の方が」

「ははは。じゃあヒロシは優等生やったわけや？」

「うん、まあまあ、並みにオール4くらいか…」

「ほんまあ。そしたらそれも、アウラでずっとやってきたことが…」

「やってきたおかげ」

「全然勉強には苦勞せずに？」

「苦勞せずに」

「クリアできていくわけや？」

「並々に…」

「なるほど、それもよかったわけやな。だからこそ、逆に言ったら野球にも打ち込めたわけや」

「そうそうそう」

「ああそうかあ。休んだりもあんまりしてなかったの、高校？」

「高校…多分その4年間で休んだの、風邪ひいたとかで1回か2回ぐらいやったと思う」

「画期的よね。それまた自信になるやろ、振り返ってみたら」

「うん、もうそれは」

「それで…しかもアルバイトもするんだよね、あれ、高校何年かな？」

「最初は、高2 くらいのとき…工場かなんかでバイトして…」

「あ、そうなんや」

「うん、流れ作業の工場があって、そこでバイトして。そこで半年くらい。野球で全国大会行くのに費用がかかるから、っていうんで、その費用を貯める、みたいな感じでバイトして…。それから、高3 の終わりくらいで自動車屋さんのバイトしていた」

「バイト先でも、今度はその仕事を通して…親方っていうのか、社長っていうのか、よくわからないけど…、その人間関係とかはどうやったん？可愛がってもらっていた？」

「いやあ、わかんないですけど…。多分まあ、向こうからしたらどうしようもないやつが来たはずやのに、そんなに、“ああだ、こうだ” って言われるわけでもなく、ちゃんと雇ってくれていた」

「どうやってそこを見つけたの？」

「それは、野球部の先輩がたまたまその知り合いで。“だれかを探しているんやけど、こういう子いいひん？” みたいな話がたまたま流れてきて」

「そしたら、それも人脈からや？」

「人脈…うん」

「そこから辞める時は“うちに就職しいひんか” みたいに言われたんじゃない？」

「それはまあ。本気かどうかわからへんけど一応なんかそういうことは…」

「言ってくれたん？」

「言ってくれてはった」

「なあ。それもよかったやん。そうか、野球やっていて一番得たものって、やっぱり人間関係？」

「うん、人間関係が一番大きい」

「野球部でも、けっこうしんどいこともあったやろ？」

「いや、もうそれは…しんどい」

「ほんまあ。最後野球部を引退するやんか。そういう時ってやっぱりある種の感動があった？」

「それが…やっぱり人間関係が野球部なんか複雑やったから、最後終わったとき“ああ、まあこんなもんやろな” って…」

「あはは。その後、高校卒業する時はなんか感動があった？」

「感動というより、恐怖…、恐怖心でもないけどな、“どうなんのやろ、自分このあと” っていう…」

「ああそう？」

「正直、その頃将来っていうのは自分の中でどんなんか見えてへんから。“まあ、とりあえずちょっと自動車に興味があるから、そっちには行くけど、どうなんのやろな” っていう…」

「そしたら、不安も大きかった？」

「不安もあったけど。…まあせっかくクラブで築いてきた人間関係もバラバラになるし、これで連絡とらなくなったらどうなるのやろか、っていうところはあったけど…」

「ああ…そうか。むしろそっちの方が

不安やったわけやな？これでバラバラ
になってしまう、みたいな」

「うん」

高校へと進学していったヒロシは、小学校の時に少しかじった少年野球への経験を頼りに野球部に入部します。このことも彼にとっては中途半端にしてしまった過去への修正なのかもしれません。もう一度やり直すわけです。そしてそこでも、また野球部という濃厚な人間関係の中でコミュニケーションそのものを磨いていくわけです。やがてヒロシは神宮球場で開かれる全国大会へ出場します。もちろんそのことがヒロシにとって大きな自信になったことは言うまでもありません。

「その後、専門学校は2年だったっけ？」

「2年」

「自動車の専門学校。そこでもまた人間関係が生まれてくる？」

「いや、学校自体が小さかったからそんなにはなかったけど、今でも卒業した後でもちょっと連絡取るような友達は、一人二人はいるし…。それでもやっぱり、「どうなん？」「仕事どう？」っていう、そういう話はできるような相手はいるんで…」

「まあ専門学校やから、そういう知識を得たり技術を得たり、そういうことで忙しかったというのと、それとあと国家試験を受けるわけやろ？」

「ああ、そう」

「国家資格持っているんやろ？ヒロシ」

「持っている」

「2級？」

「国家整備士2級」

「それは在学中に取るわけ？」

「えーと…卒業した後に試験受けて。2年勉強したらその試験が受けられますよ、っていう」

「その受験勉強とかも、その間にずっとするわけや？」

「うん、そう」

「じゃあけっこう、その時忙しかった？」

「まあみんな必死に…」

「それは絶対取らなあかんって言われているの？」

「全員が全員受かるわけじゃないし、あれも」

「ヒロシは一発で？」

「うん、一発で」

「ああほんまあ。やるやん」

「まあまあ…」

「就職活動は、いつしたわけ？」

「1年の夏すぐに。入って半年で」

「え！？そんなに早く。それでその頃にはヒロシとしてはもうディーラーに行きたいと思っていたわけ？」

「いやー、でもとりあえずディーラーしかないかな、って。まあディーラーか町工場かという募集の選択があって。求人が掲示板に貼り出されて、それでいろいろ説明会行って、話聞いて」

「スーツを着て？」

「スーツ着て」

「まあ就活をするわけや？」

「うん」

「そこでも「なんか上手くしゃべれへ」

んなあ」とかそんなことあった？そんな不安はなかった？」

「いや、説明会とかはそんなしゃべる機会とかないから…」

「ああ、聞いているだけか。面接は？」

「面接がなかなか…1年の終わりくらいに面接して、2年の頭くらいに就職先っていうのが決まっているんやんか」

「ああ、そうか。だから1年の夏くらいからいろいろな説明会なんかが始まって、面接が冬とかにあるわけ？」

「冬場…うん。12月くらいから、年をまたいで1月2月くらいまで」

「なるほど。それで2年になる時には内定が、みたいな話になるわけや？」

「うん。卒業する頃には就職先はもう決まっている状態、ほとんどの人は」

「今の会社は、最初から行きたかったところ？」

「いや、全然。もともとA社を受けて、その時やっぱり緊張して上手く話せなくて、採用に落ちたんやけど。その人の人事の人が気に入ってくれはったんかわからないですけど、“うちのグループ会社で、今行っているB社っていうところがあるんやけど、そこ2次試験があるから”って…」

「へえ、そこに行ったらどうや、って？」

「1回試験受けてみないかっていうので紹介してもらって。それで、受かった」

「へえ。でもそれはよかったよね。その人からしたら、この子はものすごくいい子なんやとか、ある程度口添えも

…」

「あったと思う。多分その人事の人が見た中で、この子はいいんじゃないかっていうのを何人か選んでの紹介の試験やったから。その中でもなんとかうまく残れたからよかったけど。やっぱりそこで落ちている人もいやはるし…。未だに自分がなんでそこが受かったんかっていうのが…」

「そうか、ヒロシが勤めているB社っていうのは、ヒロシが最初から説明会とか行ったところじゃなくて、A社で行ったところの人事の人がわざわざ紹介してくれはったところなんや？」

「紹介してくれはった。うちには求人も何もないから。その会社受ける情報もなかったし、きっかけもなかったから。たまたま、すごいラッキーで」

「よかったよなあ」

「よかった」

「そしたら後の専門学校2年目は、もうその国家試験に向けて勉強して…」

「うん、まあ試験落ちたら内定も取り消しになるから」

「そうか。そうしたら必死やん」

「もう必死やった」

高校を卒業したヒロシは自動車の専門学校へと進学します。たまたま野球部の先輩の紹介で始めた整備工場へのアルバイトがきっかけだったようです。そしていよいよ就職活動が始まります。専門学校は2年ですから入学した年に就活がスタートすることになるわけです。ヒロシは第一希望の会社には落ちたものの、その会社の人事の方の紹介で関連会社への就職が確定していき

ました。

ここでもヒロシのキャリアを導いていったのは人脈でした。コミュニケーションに対して大きなコンプレックスを抱いていたヒロシが、今度は彼が構築していった人脈の中で自分のキャリアを形作ることになっていったわけです。



職場の中で

「それで会社就職して、入ってからはどうなの？最初まず入ったら、やっぱり学生時代とギャップあった？」

「ギャップ？」

「まあ社会人っていうのか…プロやんか。学校じゃないし…」

「いや、怖いなっていう…みんなできる人やから。バリバリ働いたはる人やし。その中に入って…、正直、学校もそんな大した学校じゃなかったから。試験受かるためだけの勉強しかしてへんかって。実践とか、正直伴ってない。技術とかも。知識もそんなにないような状態でどうなんやろっていうのもあって…。まあ未だにそこはがんばらな

あかんっていう部分やけど…。まあまあ、でもしんどいなりにどうにかがんばってはいるよ」

「現場に入って、後輩はまだいないよな？」

「後輩は、一応一人いるけど、うちのお店じゃなくてほかの店舗やから」

「そしたらヒロシはまだ下っ端や？」

「下っ端、お店では」

「先輩がいろいろ言うわけや」

「まあそう」

「工場長がいて、先輩の人がいて、まあヒロシみたいなスタッフがいる。何人くらいなの、サービス全員で？」

「サービスは、自分含めて4人」

「4人でまわしているんや？」

「3人が作業して、1人がリーダーって言って、指示する人で」

「それは、マネージャーなんやな？」

「いや、リーダーの上にマネージャーがいる」

「マネージャーは作業するの？」

「マネージャーは作業しない。もう副店長みたいなもんで。いろいろフロントでお客さんの相手をしたり、ちょっと説明の難しい作業内容の説明したり。まあリーダーはそれと同じようなことをするんやけど、基本的には工場にいて、周りに指示する、っていうそういうポジション」

「そのリーダーを除いて実際に現場で作業する人は何人？」

「3人」

「3人なんや？」

「3人」

「そしたら、わりと小さい人間関係な

の？」

「かなり狭い」

「それはどうなの？」

「いや、いろいろしんどい」

「いろいろ気を遣う？」

「気を遣うっていうか、リーダーとマネージャーがちょっと職人気質で。やっぱり作業者としてはすごくできるから、今度指示する立場になって上手いことできてへんやつらを見るといろいろ思うところがあるのかしらんけど、ちょっと…」

「で、怒られたりするわけ？」

「まあ怒られはするけど…言っていることが“確かにそうやな”って思えることはいいけど。“それ、ちょっと違うんじゃないか？”っていうところで怒ってくる時があるから…、“何、この人”って思うことがある」

「そういう時はどうするわけ？」

「いやもう聞き流して“ハイハイ”って。後でブツクサ言ったり…」

「愚痴を言える相手があんまりいないのは、辛いな」

「まあ…」

「同期とかがいて、なんやあいつは、っていろいろと言えればいいのに…」

「同期もほかの店舗にはいるんですけどね」

「しゃべったりするの？」

「まあしゃべったりもするんやけど、今度は同期のやつらが、会社いきなり来なくなったりということがあって…」

「え、登社拒否みたいに？」

「そう。いきなりもう連絡もなしに来

なくなったり…」

「就職したのに？」

「今は、何か一応戻ってはいるけど…。ぼくは自分が、昔学校行ってなかったんで、そんな経験した上で就職したから、逆にそういうのが許せないっていうか。自分は恵まれているのに何を言ってるねんっていうところがあって、ちょっと最近あんまり連絡取ってないけど…」

「どういうこと、恵まれているって？」

「そういう仕事させてくれる場があるのにいきなり連絡もなしに仕事場休んで。それでもちゃんと迎え入れてくれる場所があるのに…“とりあえず彼女がいるから、彼女が別れたくないって言うんで戻ってきた”って、“おまえは何を言ってるねん”って。“彼女じゃないやろ”と。“仕事場でそういう場所を作ってくれているのに何様や”と…」

「ヒロシはえらいなあ、なんか話聞いていると…。なるほど、そういう風に思うわけや。そうかあ。まあ職場やから、いろいろ職場の人間関係っていうのが当然どこの世界にもあるんやけど、でもまあ仕事自体はおもしろい？」

「うーん、最近ちょっと好きになってきたかな。やっぱりどうしても、ちょっと興味ある程度で入ってきた世界やから、逆にちょっとしんどいところがあったりするんやけど。少し好きになりかけているのかな？やっぱ興味と好きとは違うから。そこで今ちょっとしんどい思いしている」

「どういうこと？興味と好きとは違って…」

「あー、ちょっとこういうことやってみたいな、っていう興味の心っていうか、好奇心。そういうところであまり下手に社会に飛び込むと痛い目見るといふか。やっぱりみんな好きでやっている人が多いから、ギャップっていうか、好きのレベルが違うっていうか。そこで物事に対しての見る目が違ったり考え方が違ったり。その差がなかなかしんどいな、っていう」

「なるほどなあ…」

職場に入ってから人間関係の課題は続きます。上司とのコミュニケーション、仲間とのコミュニケーション、そしてお客さんとのコミュニケーション。ヒロシはそれぞれの部分で俯瞰的にそのコミュニケーションの行方を見つめているようです。この術を彼は手に入れていったのかもしれません。

特に同僚の行動に対しては、つらい経験を乗り越えてきたヒロシだからこそ言えるメッセージが含まれているように思います。いろんな人間関係の場面で、彼はその経験からいろいろなことを学びとり、未知への経験にそれを活用させているように感じられました。



キャリアの中の物語

「いやまあ、ヒロシは現在に至るまでずいぶん苦労してきたから…。小学校3年の時からやから、8歳とか9歳とか」

「9歳くらい」

「そうやなあ？で、今のヒロシが23…？」

「今年で4」

「24っていうことは、15年間なんや。これまでしゃべってもらったことは、自分の15年間って振り返ったらどうなのっていうこと。15年やで、これ」

「いやあ、なんかまあでも…」

「24年のうちの15年間、言ったらまあ、今しゃべった部分がヒロシの人生の大半の部分なんや。どうですか？」

「いやあ、しんどいことばかりやったから、逆になんか最近他の人らがちょっと弱音吐いていると、しょうもないなって思うような。けっこうマイナス面でのことはけっこう経験してきたから、これからは悪いことあっても大したようなことは思わへんかな。ある意味ちょっと強くなれたかな。底を知っているから、っていう。あとは上が

るしかない、っていう」

「特にだから…ヒロシにとっては、アウラに来てここを卒業していく…。卒業したのが、だから16か…。初めてここに来たのが14か…。その2年ちょっとっていう間に、ずいぶん変わっていったんやね、多分ね」

「まあ…」

「ヒロシにもずっと言ってきたかもわからんけど、私は、不登校になったっていうその経験が自分にとってよかった、そういう風になってもらいたい、って思っているんやんか。それは不登校を別に肯定しているわけじゃないんやけど、人生ってなんかな、そりゃ楽しいこともあるけど辛いこともいっぱいある。でも辛いことは無駄じゃない」

「うん」

「辛いことって、意味があるやんか。ずっと。だから例えば学校へ行けなくなっただ子どもとか、ずっと家で引きこもってる子らって、それはもう暗黒の記憶なんやんか。暗黒の時間なんや、言ったら。でもその、例え暗黒であっても、それはすごい大事な時間なんで、それを大事な時間と思えるような生き方をしてほしい、って思うやんか。だから今のヒロシのコトバで言ったら、そんなことがあったからこそ、別に今少々いろんなことがあったって、なんかへこたれないわけよ」

「まあ確かに振り返った時に、普通に学校行っていたら今のような状態…今よりもっといいような状態になっていたかっていうと、そうでもないだろうなって思うことがあって。だからそう

いう人間関係があったからこそ、今の自分があるっていうのはよく思うし。そういうところで…まあ学校行ってへんかったことがよかったとは思わないけど、まあでもそういう人生でこれたこともよかったかな、とは思う時ある」

「いやあ、なんかよかったよな。私は感動するわ、そんな話聞いたら。ありがとう」

「うん」

「それで、いろんな人にこういう声を聞いてもらったりすることで、自分も変われていくんだっていう希望が持てればいいなあって…」

「うん」

「なんか今、引きこもったり学校へ行けなかったりしている人って、いっぱいいるわけよ、世の中には…」

「うん」

「それで、当時のヒロシと同じように、それは大変辛い経験なんよ、やっぱり。だって、家にずっといる生活で“ああ幸せ”って思っている人って多分いないと思うねん」

「うん」

「その子らに、ヒロシがメッセージを投げかけるとしたら、何かある？」

「メッセージ…？難しいところやけど…。やっぱり人は人との関係性で成り立っているから、コミュニケーションはどうしても大事なところやし。そこで嫌なこともあれば、楽しいこともあるし。どんな嫌なことがあっても人とのかかわりは大事にしよう。それが一番やと思う」

「なるほどなあ。なんかヒロシいいこ

と言うなあ！説得力あるわ、やっぱり」
「いやまあ、いろいろ今もしんどいけど…まあ人なしでは生きていけへんっていう、それがほんまのところなんで。どれだけ嫌やと思っていても、ふとした時、どんな些細なことでも人がいるから。ぱっと遊びに行こうと思っても一人じゃ楽しめへんことも。友達がいるから楽しめるところもあるし。そういうのが大事かな。自分の今の環境をもうちょっと考えて、自分でその環境を作れているわけじゃないから。周りに誰かが絶対いて、そういう場所があるから。そういうことをもうちょっと考え直して、大事に思っほしい」

「まあよかった。今ヒロシが言ったコトバを、別に私がヒロシに伝えたわけではない」

「うん」

「私たちが関われることっていうのはいつも限定された時間軸の中。教育の世界って、始まりがあって終わりがあるんや」

「うん」

「どこかで“じゃあ始めましょう”っていうことがあって、どこかで“ではさようなら”っていう巢立ちあるわけ。私たちはその限られた時間の中で、何かをやっぱり伝えるわけよ、きっと。でもそれは、答えじゃない。その答えを作るのは、子どもたち自身、ヒロシ自身が作るものかもしれない」

「うん」

「今言ったようなメッセージも、ヒロシの中での野球部の経験があったりとか、社内の経験があったりとか、そん

な中でヒロシの物語っていうのが当然生まれていくわけで、別に私たちが伝えたわけじゃない。だから私たちにできることっていうのは、ヒロシが自分の答えを作れるように。そうやって作れるようになる下地を作る、っていうことやったような気がするわけ」

「うん」

「だからそれは、どういうわけか「コミュニケーション」というキーワードの中で集約されていくんや。家族の中でのコミュニケーション…。多分その、幼稚園のころからコミュニケーションが下手で、って言っていたやろ？それは要するにコミュニケーションが上手くいってない家族の中で、ヒロシ自身は生まれ育ってきたことと大いに関係すると思うねん。言っていたやん、物心つく前からお父さんとお母さんのコミュニケーションは成立してなかったって」

「もう…うん。一応子どもがいるからごはんを食べる場とかは作ったりしていたけど、それでもやっぱり…」

「そやから多分、そういう中でヒロシ自身は育ってきたので、当然そのコミュニケーションに対して、自分が億劫になっていくっていうか、自信が持てへんっていうか、そんな状況が生まれてきた。でも、そういうものをヒロシ自身が回復していく」

「うん」

「回復するには、当然自信がいるやんか。だって自分の苦手なことに向かうんやから」

「うん」

「で、その自信はどこから来たかっていうと、一つは、ヒロシがアウラに毎日来る。コツコツ勉強するわけや。で、多分プリントがどんどんたまっていたと思うねん」

「たまっていた」

「まああるいは、雨の降る日も風の吹く日もチャリンコに乗ってアウラにやってくる。そのうち自分の体もどんどん変化していった」

「うん」

「そういうことが積み重なって、なんかヒロシの自信を作っていたのかもわからへん。で、その中で、すごく苦手なコミュニケーションにも自信が持てるようになって、少しずつ同年代の子とのコミュニケーションにチャレンジしていったり。…トイレに毎回行かなあかんかったけど。そやろ？」

「そうでした」

「そうやったけど、ヒロシなりにチャレンジをやったわけ、それは」

「うん」

「そういうことができたという成功体験の積み重ねがあって、そのことがやっぱりヒロシのコトバや物語を作っていたかもわからんな、と思うと、感動的やなあと思うんや。…まあよかったよね。24歳か」

「もうじき。12月で」

「また、なんかの機会にこんな風に私と一緒にしゃべってくれたら」

「いつでも」

「ありがとう」

た。もちろんこれがすべてではないでしょう。しかし、彼は自分史をこうして自分のコトバにしたのです。自分を語ることは、自分を相対化させることであり、自分を見つめるもう一つの目を持つことです。そしてこのもう一つの目が、彼のキャリアに幅を持たせ柔軟性を持たせることにつながっているんだと思います。

ヒロシのキャリア形成の過程には、一貫して「コミュニケーション」というストーリーラインが流れていました。それは幼い頃からの彼のこだわりでもあり、コンプレックスでもあったのです。しかし、ヒロシはそのコミュニケーションに向き合います。最初はアウラの森で、高校の野球部で、アルバイト先で、専門学校で、そして職場で。やがてヒロシは、その苦手だったコミュニケーションを通して自信を手に入れたのだと思います。

教育は、限定された時間軸の中で彼らに関わる営みなんだと思います。その間に私たちは決して彼らのキャリア形成に関する答えを出すことはできません。ただ、私たちの投げかけた何か、あるいは私たちと一緒に共有した経験の中で、彼らは自分なりの答えを出すすべを手に入れていったのかもしれない。キャリアを通して浮かび上がってくるそれぞれの物語。その一つ一つの物語の中に、彼らのこれまで生きてきた、あるいはこれから生きようとする意味が感じられるように思うのです。

こうしてヒロシの 15 年間で語られました



最後のシゴト

その後、私たちはヒロシのお母さんが亡くなられたことを知りました。実は彼が高校生の時にガンが発見され余命宣告をされていたそうです。お母さんは、ヒロシにたった一つ、遺言を残していました。それは、“自分が死んだあとに自分のお墓を建ててほしい”ということ。“死んでまでもお父さんと同じお墓に入りたくない”ということがお母さんの願いでした。そしてお母さんは、生前そのお墓を建ててもらうためにお金を用意していたそうです。

やがてお母さんが亡くなられた後、ヒロシの家は、バラバラになっていきます。残りの3人はまだ一緒に住んでいるものの、みんな自分のことだけしかしない。共同のシゴトは誰もしないので、しかたなくヒロシが休みの間にやっているそうです。

「おれ、おかんのお墓を建てたら、家を出ていこうと思うねん」

ヒロシはそう私に話していました。でも私はそれがいいとは思いませんでした。彼

には、自分の家に対して一定の責任を持ってもらいたいと思ったからです。

「一度、ヒロシの家のことを、みんなで話し合ったらどうや。ヒロシが出る。お姉ちゃんもこの機会に出る。私はそれでもいいと思う。そしたら、家族がバラバラになりやがて消えていくわけや。それでもいい。だって、家族ってそういうもんや。ある段階に始まって、ある段階に無くなっていく。ぼくらは家族がいつまでもあるように思っているけど、それは幻想にしか過ぎない。いつかはなくなっていくもんや。でもその家族がなかったら、ヒロシも生まれてなかったわけや。だから家族に対してある一定の責任をヒロシ自身も持たないといけないんじゃないかって思うんや。だから、これからこの家をどうするかという話し合いを、ヒロシから投げかけてみたらどうや。ヒロシが、最後にこの家族をどうするかを提案する。ひよっとすると、これが家族に対する最後のシゴトかも知れんで…」

私はそんなことをヒロシに向かって話しました。

その後、ヒロシからの報告を私はまだ受け取っていません。このことは大変大きな問題なので、そう簡単には結論が出ないかもしれませんが、今のヒロシならそれも乗り越えていってくれるように思っています。